

## 戦時期日本における「体力向上」の祭典<sup>イベント</sup>

——紀元二千六百年・東亜競技大会を中心として

小澤考人（東京大学大学院）

紀元二千六百年、幻の東京オリンピック、レクリエーションの力学

東京オリンピックがアジア初の大会として 1964 年に開催されたことは、戦後日本の高度成長期を照らし出す明るい星座のように、多くの人々に記憶されている。それがかつて開催決定後に戦争で消滅した 1940 年の「幻の東京オリンピック」以来、ようやく実現した夢であったことを知る人も少なくない。だがそれにかわり同じ西暦 1940 年に、アジアの五輪ともいうべき国際スポーツ競技大会が日本で開催された事実はそれほど知られていない。紀元二千六百年の奉祝イベントとして開催された、東亜競技大会がそれである。

本報告では、日中戦争下で開催されたこの東亜競技大会に焦点を当てる。戦時期日本のスポーツや娯楽など文化的側面をめぐっては、従来「暗い谷間」の時代として、軍国主義体制による弾圧やファシズム体制下での統制といった局面が取り上げられてきた。それは戦後、「明るい民主的」国家への転換を歩み出した日本社会において、戦時期の思想統制や消費と祝祭の抑制など文化の「抑圧」こそは、自由と主体性を侵害するファシズム期の悪しき象徴として、克服されるべき対象と見なされたことにも深く関わっている。つまり戦争批判と反省の視線が、反復されてはならない「暗い谷間」を問題化してきたのだが、近年、戦時期におけるむしろ文化創造の営みや、国家権力による一方的統制ではない下からの能動的参加も含めた複合的諸側面についても捉え直しが始まっている。いわば単なる「抑圧」のみならず、それを巻き込む異なる形での様々な扇動もまた問題となり始めたのである。近代日本は明治国家の当初から国家装置として祭典を創出してきたが、戦時期においてもスポーツや祭りが一様に弾圧されたのではなく、本報告が検討する東亜競技大会もまさに「スポーツの祭典」として開催されたのである。より深い批判的視線を堅持するためにも、戦時期における諸力の絡まりあう複雑な実態を丁寧に追跡していかなければならない。この時期には明治神宮大会など重要なスポーツ・イベント数多く見られるが、本報告はこれまで研究主題として看過されてきた東亜競技大会を中心に焦点を当て、この出来事の具体的な内実とその出現を促した力学について照明を当てるものである。

東亜競技大会は、日中戦争の長期化により二年前に東京オリンピックが返上され、かわりのヘルシンキ大会もまたヨーロッパでの第二次世界大戦の勃発により二ヶ月前の 4 月に放棄が正式宣言されたばかりの戦渦の国際情勢下で、東京大会が 1940 年 6 月 5 日～9 日の五日間にわたり、関西大会は 6 月 13 日～16 日の四日間に開催された。大会の主催者は紀元二千六百年奉祝会・東京市・大日本体育協会による共催のもとで、東京大会は、明治神宮外苑の競技場・相撲場・野球場を中心に、日比谷公園コートや日本青年館、大宮競輪場などの会場で行われ、これに対して関西大会は、奈良県の橿原神宮競技場をはじめ、兵庫県の子園野球場、大阪府の花園競技場・天王寺公園・真田山プールなど拡散した範囲で開催された。開催国の日本から 326 名の参加を筆頭に、外国からは満州国 199 名、中華民国（汪兆銘政権）65 名、フィリピン 71 名、ハワイ 17 名のほか、在留外国人 54 名を含めた 406 名、合わせて 732 名の青年たちによって、それは国際競技大会という形のもとで

繰り広げられたスポーツの祭典である。

この国際スポーツ競技大会がなぜ開催されたのかという問題について、大日本体育協会の報告書も含め、これまで一般にく（幻の東京）オリンピックの代替としての紀元二千六百年奉祝事業として理解されてきた。それは確かにそのとおりだとしても、しかしそれを再考に付すと次のような問いが浮上してくる。まずオリンピックの代替という点について、なぜ返上した企画を代替する必要性があったのだろうか。つまり東京オリンピックの返上には理由があり、それが日中戦争に起因しているとするれば、1938年の返上時点よりもお戦禍の泥沼化した1940年に、なぜわざわざ国際スポーツ競技大会を開催する必要性があったのだろうか。また国際大会とはいえなぜアジアに偏向しているのか。紀元二千六百年の奉祝という点でも、なぜ政府主催の祝典事業（建国祭・銃後奉公祈誓大会など）だけではとどまらず、それとは別に国際スポーツ競技大会を行う必要性があったのだろうか。

このような問いのもとに、1930年の東京オリンピック招致構想を発端として特に1938年7月15日の東京オリンピックの返上決定というポイントに注目して追跡していくと、次のような構図が浮かび上がってくる。すなわち、帝都復興の次なる課題として一都市（東京市）の構想から出発したオリンピック招致構想が、紀元二千六百年の奉祝というナショナリズムの論理を付加され実現化することで、1938年7月の東京オリンピック返上決定後にはオリンピック返上や万博の延期にもかかわらず、紀元二千六百年の奉祝という論理自体はその普遍性により消滅することなく、今度はむしろ西暦1940年が近づくにつれ軍国主義体制とナショナリズムの深まりとともに、何らかの祭典・イベントを行う契機や前提となっていくという構図である。その際、結論を先取りしていえば、大日本体育協会による1938年8月9日開催の座談会（「オリンピック返上後の体協の方針」）や1939年11月19日開催の座談会（「紀元二千六百年を迎えて」）に注目すると、そこに前景化してくるのは、オリンピックというイベントの領域を越えて、国民の「体力向上」を促進する力学が立ち上がり作動し始めている様相であり、本報告で主題とする東亜競技大会のみならず、同じく1940年の10月16日から大阪市で5日間開催された興亜厚生大会をはじめ、全国で多々行われた小さな運動会や武道大会などを加えると、この紀元二千六百年という平面には直接・間接に「体力向上」の祭典として並ぶイベントが相当数に及ぶことが判明する。

本報告では、このように東亜競技大会という一つの国際スポーツ競技大会を中心的に取り上げ、この出来事の具体的内容とその出現に關与する重層的な力学を探究することにより、戦時期日本におけるスポーツ・イベント、より特化していえば興亜厚生大会や国民厚生運動も含めてそれらを貫くレクリエーションの力学を浮かび上がらせ分節していくことを課題とするものである（具体的なデータ・資料の提示は報告レジュメと補足資料参照）。

#### <紀元二千六百年の祭典——中央諸団体等による大規模な奉祝イベント>

2月	樫原神宮奉餼米継走（2日）、建国祭（11日・紀元節）
6月	東亜競技大会、奉祝天覽武道大会（18～19日）、銃後奉公祈誓大会（19日）
7月	東亜教育大会（8～12日）
8月	樫原神宮奉納武道大会（16日）
10月	興亜厚生大会（16～20日）、明治神宮国民体育大会（27日開会式）
11月	海外同胞東京大会（4～8日）、紀元二千六百年式典・奉祝会（10～11日）

（出所）『紀元二千六百年祝典記録』（第十二冊）、下線部は「体力向上」の祭典。